

潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory, City of Niigata

第10号 2019年3月
新潟市

潟と人とのより良い関係を探求し、
潟の魅力と価値を再発見・再構築。



基調講演で琵琶湖と人々のかかわりに
まつわる実体験を話す講師の嘉田由紀子さん

- ・「異人池」について P. 2
- ・潟研とびっくす P. 3
- ・潟のエッセイ P. 4

「みんなの潟学」出版記念 潟環境研究所シンポジウム(2019年2月10日)を開催しました!

潟環境研究所では、多様な視点から新潟を象徴する“潟”を読み解く本『みんなの潟学』の出版を記念したシンポジウムを開催しました。今回は基調講演と執筆者によるパネルディスカッションの2本立てで、「水との共生」をテーマに、今後の新潟市における潟と人とのあり方について議論しました。

参加者からは「潟について知っているようで知らないので『みんなの潟学』は有意義」「新潟でも新たな展開に希望が見えた」「市はもっと長い目で研究・調査を」「越後平野を1つとしてみる潟学の取組みは良い」「研究を続けて知性を共有させてほしい」「力が湧くシンポジウム。日本初のラムサール都市認証を目指して」「琵琶湖博物館を目指して潟学博物館が出来たら良い」など、数多くの意見や提案のほか、温かい激励の言葉もいただきました。



もう1人の基調講演者である関健志さんは、スケールの大きな海外の湿地復元事例を紹介。嘉田さん関さんとも、大変興味深い講演となりました。



第2部パネルディスカッションでは執筆者が一番伝えたい事をもとに議論しました。
(写真上段左から) 太田 和宏、高橋 郁丸、澤口 晋一、大熊 孝
(写真下段左から) 隅 杏奈、吉川 夏樹、井上 信夫、志賀 隆



当日は約230名もの参加がありました。今回は参加者と出演者との距離も近く、第2部でもパネリストたちの熱のこもったスピーチや参加者からの活発な質疑もあり、会場内は終始活気にあふれていました。

みんなの潟学出版記念 新潟市潟環境研究所シンポジウム開催概要

【日 時】 2019年2月10日(日) 13:30~16:30 【場 所】 新潟国際情報大学中央キャンパス 9階講堂

【プログラム】 第1部: 基調講演 嘉田由紀子氏(滋賀県立琵琶湖博物館元総括学芸員、前滋賀県知事)

関 健志氏(公益財団法人日本生態系協会事務局長)

第2部: パネルディスカッション みんなの潟学で「潟」を読み解く

万代橋から柵谷小路を通過して寄居町交差点をそのまま直進すると「どっぺり坂」と呼ばれる高さが10メートルを超える急な階段坂に突き当たります。かつてこの坂の手前に「異人池」と呼ばれた、大きさが90×45メートルほどの池がありました。すぐそばにカトリック教会があり外国人の神父さんが住んでいたことから、いつしかそう呼ばれるようになったようです。



1/2.5万地形図：新潟北部、明治44年測図 大正2年製版 1/2.5万地形図：新潟北部、明治44年測図 昭和4年修正 1/2.5万地形図：新潟北部、昭和23年修正
 図1 「異人池」周辺の地形図の比較

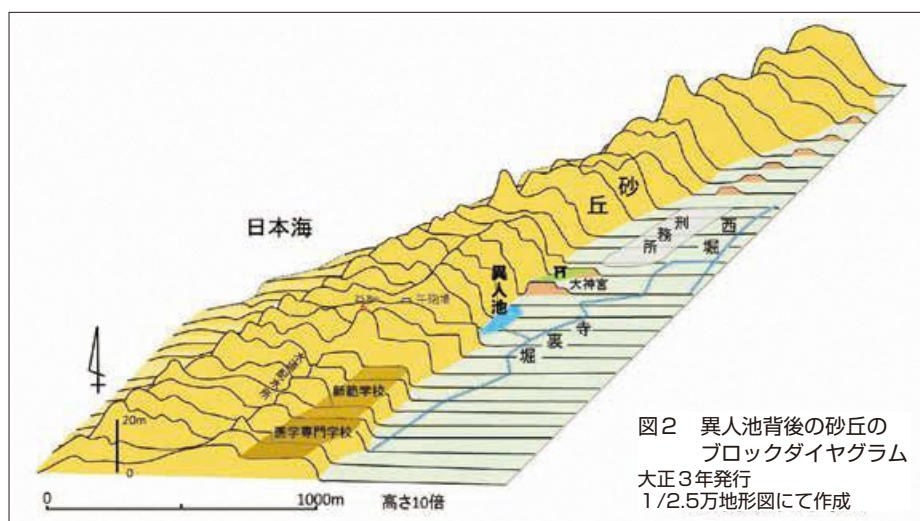


図2 異人池背後の砂丘のブロックダイヤグラム
 大正3年発行 1/2.5万地形図にて作成

では、異人池の背後に凹凸に富む砂丘が広がっていることがわかります。この砂丘は新潟砂丘の中で最も新しい時代に形成(新砂丘Ⅲ：約1800～900年前)されたものです。図2は同じ地形図を使って作成した地形断面図です。図から砂丘の東縁は急な崖となっていてのがよくわかります。異人池はこの砂丘がつくる崖のほぼ直下、低地との境界部分に位置していました。当時は、砂丘の縁にはマツが植えられていたようですが、それ以外は砂地が荒地となっていた様子が地形図からわかります。昭和6(1931)年発行の地形図でもその様子に変化はありません。しかし、昭和23(1948)年の地形図では砂丘の上に大きな建物が何棟も造られていることがわかります。池の縮小はこの間(昭和6年～23年)に進んだようです。砂丘上に建造物が建つと雨水の浸透が抑えられ、結果的に地下水位の低下につながります。異人池が干上がってしまった最大の原因はこうした土地利用の変化ではなかったかと考えられます。

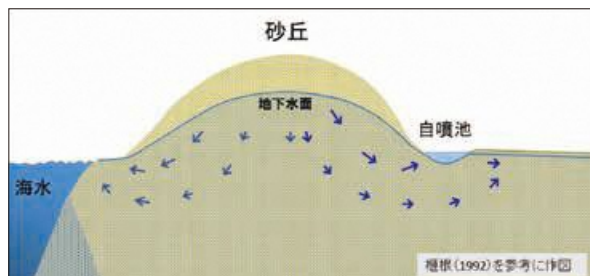


図3 砂丘の地下水循環の模式図

異人池はちょうどそのような場所に掘られた池だったと考えられます。

「異人池」それは自然と人との営みの調和が作りだした一時の夢物語だったのかもしれない。

文献：
 異人池 復元プロジェクト記録集 (2018) 新潟大学・新潟大学旭町学術資料展示館。56p.
 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢 (2015) 暦年校正年代による新潟砂丘列の形成年代の見直し。第四紀研究, 54: 139-143.
 榎根 勇 (1992) 『地下水の世界』日本放送出版協会。222p.
 三芳梯吉 (1986) 『ある池のものがたり』福音館書店。47p.

とびっくす① 潟を読み解く本『みんなの潟学』の読者からのお便りをご紹介します！

2018年11月に出版してから、『みんなの潟学』に関する問い合わせが多く寄せられるとともに、読者から数多くの感想や激励のお便りが届いています。ありがとうございます。第9号では中静透さん（総合地球環境学研究所特任教授・プログラムディレクター）の書評を掲載しましたが、今号では皆さんからいただいたお便りの中からいくつかをご紹介します！



越後平野の成り立ちや今まで行われてきた開発について分かりやすく解説されており、自分の住んでいる土地について詳しく知ることが出来てよかったです。

(旧) 潟東村の出身で幼少から潟は小学校歌で知っていましたが、当時の風景や土地改良歴史等々もっと知りたいと思っていた矢先でした。

潟は新潟市の宝で、その宝物を、それぞれの分野の専門家が、人々の暮らしと結びつけながら論じている。それが1冊の本にまとまっていることが素晴らしいと思いました。

重要なことが分かりやすい言葉で述べられていてスッと心に届きました。自然への尊敬や愛情がよく伝わります（読者に対する愛情も）。



『みんなの潟学 —越後平野における新たな地域学— (A 5版 144頁) 新潟市潟環境研究所編

2018年11月 初版第1刷発行

ISBN：978-4-9910471-0-7

この本は非売品です。

市内の図書館で貸し出しが可能です。

新潟市周辺には私が思っていた以上にかつてはたくさんの方があったのには驚きました。確かに鳥屋潟など一昔前に比べると水質がかなり良くなっているのは感じます。何とかよりよい水辺を残してゆきたい気持ちは著者の方々と同じです。

敬愛する十返舎一九も佐潟を訪れ、夕陽を見ていたということに感動しました。佐潟の魅力というものは時間を超越し受け継がれてきているものなのだと再確認ができました。

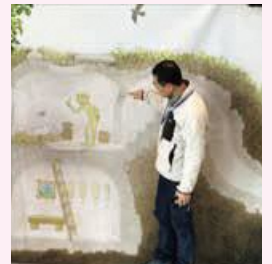
とびっくす② 「ビュー福島潟」に河童のユウタの棲家の原画を拡大した“巨大タペストリー”が登場

水の駅「ビュー福島潟」の6階展望ホールに、児童文学『河童のユウタの冒険（上・下巻）福音館書店刊 斎藤惇夫／作 金井田英津子／画』に登場するユウタの棲家を描いた大きなタペストリーが登場しました。これは、恵みの湖（福島潟）に棲む河童のユウタの世界観を通して多くの人に福島潟の魅力を感じてもらおうと、新潟市北区自治協議会が設置したものです。

棲家の原画を描いた挿絵作家の金井田英津子さんからは「斎藤先生の物語の力で、素晴らしい福島潟の自然が、多くの子どもたちの心の糧になってくれることを願ってやみません」との言葉も寄せられました。



大人の背の高さと比べると、とても大きなことがわかりますね。



「河童のユウタの冒険」
(上・下巻) 福音館書店刊
斎藤惇夫／作 金井田英津子／画

展示場所：水の駅「ビュー福島潟」

〒950-3328 新潟県新潟市北区前新田乙493番地 TEL：025-387-1491 FAX：025-384-1200

■開館時間 午前9時～午後5時／休館日：月曜（祝日の場合翌日）、年末年始（12月28日～12月31日、1月2日～1月4日）

「潟」のエッセイ



10 自然への感性と知性をみがこう!!

大熊 孝 / 新潟市潟環境研究所所長

潟環境の調査・研究は、今後、新たな組織に引き継がれていく。私は2019年3月をもって、潟環境研究所所長の任を終えることになった。この5年間、新たな発見や出会いに楽しく仕事をさせていただき、感謝に堪えない。最後に、この5年間を通じて、深く思い知らされたことを述べておきたい。

それは、おおむね70歳以上の我われ世代は、子供の頃、自然の豊かさを肌で感じて育った世代であるが、この世代が長ずるにしたがって、経済の高度成長の中で、「よい子は川で遊ばない」を容認してしまい、自然の恵みを収奪し、自然を破壊してきたことである。いくら豊かな感性を持っていても、自然破壊を止めることはできなかったということである。

それは何故なのか？私の結論は、感性だけでは自然を護れず、自然への知性を欠如していたからと考えている。身近な自然の豊かさは感性で知ることができる。しかし、地域全体の時空間の中で、その自然と人がどのようにかわってきたのか、それは知性で鳥の目・虫の目になって把握するしかない。自然に対する感性と知性があってはじめて、地域の自然を護り、自然の豊かさが持続できるのではないかと考える。

その知性を育むものは何か？それは、子供の頃に自然文学に親しむことであり、小・中学校における自然教育にあると考える。

例えば、イギリスでは、自然収奪の資本主義社会を作り出した国であるが、『ユートピア便り』（ウィリアム・モリス、1891）や『たのしい川べ』（ケネス・グレアム、1908）、『オオバンクラブ物語』（アーサー・ランサム、1934）など著名な水辺文学を生み出しており、イギリス人のほとんどがこれらを読み、大人になっても自然と親しみ、楽しい関係を継続している。

日本では、こうした文学がほとんどない。せいぜい『たのしい川べ』に触発されて書かれた斎藤惇夫著『ガンバとカワウソの冒険』（1982）ぐらいである。斎藤惇夫（1949～）は新潟出身であるが、2017年に『河童のユウタの冒険』を著してくれた。福島潟に棲む河童のユウタが狐のアカネと天狗のハヤテとともに信濃川の源流まで旅をして、ある使命を達成する冒険物語である。そこには自然への知性を磨く示唆が満載である。今後、この本によって多くの子どもたちの知性が磨かれるに違いない。

もう一つ、自然への知性を磨く方法は、学校教育に他ならない。身近な自然を楽しみつつ、小・中学時代に優れた自然教育を受けた者に自然と共生する優れた人物が多い。例えば、写真家で水景クリエイターの天野尚（1954～2015）は、鎧潟で遊ぶ傍ら、漆山中学校で長嶋義介（1938～）に薫陶を受けた。それが画期的な水槽・アクアリウムを生み出すとともに、干拓された鎧潟の復元を唱導する歴史眼を養った。第1回『みどりの学術賞』を天皇陛下臨席で授与され、生物多様性研究で国際的に活躍する中静透（1956～）も、越路中学校時代に笹岡茂（1930～1988）に自然教育を受けていた。

20世紀は、科学技術で自然を破壊して経済成長を遂げてきた。21世紀は、劣化した自然を回復させ、自然と共生する安定した社会とすることで、新たに生きる希望を作り出していく世紀にすべきと考えている。そのためには、自然に対する感性と知性がともに不可欠である。最後に、その知性を磨くうえで、潟環境研究所が著した『みんなの潟学』（2018）が役立つことも願っている。

新潟市潟環境研究所の廃止について（お知らせ）

当研究所は、2014年4月に、潟と人とのより良い関係を探求し、その魅力や価値を再発見・再構築することを目的に設立しました。研究所設立以来、地域の皆さまの協力を得ながら、設立の趣旨に沿った役割を果たしてきましたが、今後は自然環境保全の取り組みと潟の魅力発信を一体的に展開していくため、2019年3月31日をもって当研究所を廃止し、業務を環境政策課に一元化します。新しい問い合わせ先は下記のとおりです。

2019年4月からの問い合わせ先

新潟市環境部環境政策課 ☎025-226-1359

〒951-8550 新潟市中央区学校町通1-602-1（白山浦庁舎2号棟3階）



発行

2019（平成31）年3月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550 新潟市中央区学校町通1-602-1（市役所本館4階）

☎ 025-226-2072 e-mail kataken@city.niigata.lg.jp

新潟市 潟のデジタル博物館

NIIGATA City Wetland Digital Museum

新潟市内に点在する湖沼「潟」に関わる資料や情報をまとめたデジタル博物館です。

URL <http://www.niigata-satokata.com/>

